

**屋久島一周ウルトラ**

**ECO マラニック物語**

**選手の気持ち**

## 屋久島一周ウルトラエコマラニック

### ★第1話: 新たなる挑戦★

「私の名前は田池 里香。40 歳。趣味はランニング、特技は…天然ボケかな？」そう呟きながら、カフェでスマホを片手に RUNNET を検索していた。以前、100 キロのウルトラマラソンにチャレンジしたが、タイムオーバーで無念のリタイア。再挑戦したい気持ちはあるが、あの時の苦い記憶が足を引っ張る。そんな時、画面に現れたのは「屋久島一周ウルトラエコマラニック」のエントリーページ。

「制限時間 16 時間…！？ 前は 14 時間だったから、これならいけるかも！」里香の心が騒ぎ出す。場所は屋久島。豊かな自然が広がる島でのウルトラマラソン…。日程は 1 月の三連休、ちょうど予定も空いている。「これは運命かもしれない！」と鼻息荒く、大会ページを読み進める。

「前夜祭には地元の子供たちの演奏、抽選会、じゃんけん大会…なんか楽しそうじゃない？」地元料理や焼酎も並ぶとあって、里香の心は一気に前夜祭参加モードにシフト。「帰りの専用バスもあるし、これなら安心して楽しめそう！」と、エントリーページへと進む。

大会は 100 キロ、55 キロ、26 キロ、26 キロファミリーの 4 つのカテゴリーに分かれており、里香は迷わず 100 キロを選択。スタート時間は 5 時から 6 時まで、10 分ごとのウェーブスタートだ。

里香はスタート時刻を選択の際、エイドステーションのルールについて目にした。5 時にスタートした選手たちは、特に走力のある（速い）選手にとって不便な状況が待っていることに気づいたのだ。すべてのエイドに開設時間が設定されており、中盤以降のエイドステーションは、早すぎる通過や遅すぎる到着では利用できないというのだ。しかも、5 時スタートの選手は 12 時間以内のゴールは認めないとされているが、そんなに速く走れるのなら後方からスタートしてくださいという意味らしい。

「つまり、5 時スタートの選手が 10 時間～16 時間ギリギリでゴールする選手を基準に、エイドは開設されているけれど、タイムオーバーで走り続ける選手には利用できないということか」関門でなくても自らリタイアしてくださいと言うことですね。

逆に、6時スタートを選べば、8時間半の完走ペースでも、すべてのエイドに立ち寄ることができるのだ。こう考えると、スタート時刻の選択は、戦略的な要素を含んでいることに気づく。里香は、自分に合ったスタート時刻を見極めることが、完走への鍵であることを再認識した。

「走力がある人は遅い時間がいいみたいだけど…私は早めにスタートしないとダメだな」と5時スタートを選ぼうとしたが、既に定員オーバー。「ええ！？やっぱりみんな早く走りたいんだ！」と焦りつつも、5時10分のスタートにエントリーを完了。

「宿も予約しなきゃ！」と思った瞬間、里香はまたもや慌てる。屋久島の土地勘がなく、大会ページのおすすめ宿を参考に電話するも、どこも満室…。まさかの宿探し難航に汗が滲む。数件目でようやく宿を確保し、一安心。大会専用バスが運行されるそうなので、そのバスに乗って会場まで行けるから会場から離れていても問題なし。「次は飛行機の予約だな」と、里香の準備は続く。

「さあ、大会まであと3ヶ月！今度こそ、完走してやるんだから！」里香は決意を新たに、ランニングシューズを握りしめた。

ハッシュタグ

#ウルトラマラソン #屋久島 #新たなる挑戦 #ランニング #完走目指す

★第2話: 屋久島入りと前夜祭の興奮★

年末のある日、里香のポストに1通の封筒が届いた。差出人は「屋久島ウルトラマラソン実行委員会」。封を開けると、大会に関する案内とプログラムがぎっしり詰まっている。エイドステーションの位置、さらには大会ルールまで細かく説明されている。コースマップはホームページからダウンロードらしい。「これ、絶対に熟読しなきゃ！」とテンションが急上昇した里香は、そのままジョギングに出かけた。

大会前日、里香はついに屋久島入り。空港から路線バスで前日受付会場へと向かう。「ゼッケンと参加賞をもらわなきゃ！」と、少し興奮気味にバスを降りる。受付を無事に済ませ、ゼッケンと共に手にした参加賞のTシャツにほっこり。「これ着て明日は絶対完走するぞ！」と小さなガッツポーズを決める。

その後、前夜祭まで少し時間があつたので、里香は会場付近をウロウロと探索。屋久島の自然と清らかな空気に心を落ち着かせつつ、16時40分に前夜祭会場に到着。子供たちが太鼓の前でスタンバイしており、並べられたテーブルには美味しそうな料理がずらり。お酒もソフトドリンクもたっぷり準備されている。

16時50分、子供たちの力強い太鼓の演奏が始まり、前夜祭がいよいよスタート！会場は活気に満ち、町長や大会委員長の挨拶の後、みんなで乾杯。「私は明日のためにお酒は控えよう…」と思いつつ、周りを見ると大勢が飲んでいることに驚く。だが、その賑やかな雰囲気不思議と里香に元気を与えてくれる。

続いて小学生による金管バンドの演奏が始まった。見事な演奏に、里香の胸の中にも勇気が満ちていく。「明日、頑張れそうな気がしてきた…！」と、心が強くなった。

次はお待ちかねのじゃんけん大会。トーナメント方式で、勝者が負けた人の名札シールをもらっていくという独特なルールに、里香はすっかり魅了される。「勝てば勝つほどシールが増えていくななんて面白い！」。最後の勝者には、なんと次回大会への招待と鹿児島～屋久島間の往復交通費が副賞として贈られるとのこと。「50,000円相当！？これは気合入る！」と里香は思わず興奮してしまった。

さらに豪華な景品が当たる抽選会も開催。飛行機のチケット、ホテル宿泊券、地元の焼酎など、どれも欲しいものばかり！でも残念ながら、里香は何も当たらなかった。それでも、会場の賑やかな雰囲気にすっかり心が満たされていた。

19時、前夜祭は無事に終了し、里香は大会専用バスで宿に戻る。明日は3時起き。

ゼッケンをウェアに装着し、マイカップなどの必須アイテムをザックに詰めて、21時にベッドへと潜り込んだ。「明日は絶対完走する！」と決意を胸に眠りに落ちる里香。明日はついに本番だ。

★ハッシュタグ:★

#前夜祭の感動 #屋久島ウルトラマラソン #じゃんけん大会のチャンピオン #豪華景品の抽選会 #明日は完走するぞ

屋久島一周ウルトラエコマラニック

★第3話: 大会当日、100キロへの挑戦★

朝3時、アラームが鳴り響き、里香は眠い目をこすりながら起床。事前に準備しておいた朝食を口に運び、まだ暗い道を指定のバス停に向かう。屋久島には24時間営業のコンビニがないため、朝食を事前に用意しておくのが大事だと改めて感じる。「お弁当も予約しておいて正解だったな」と思いながら、無事にバスに乗り込んだ。

4時30分、大会会場に到着。里香のスタートは5時10分なので、少し時間に余裕がある。朝の屋久島はまだ冷え込むが、耐えられない寒さではない。走り出せば大丈夫だろうと自分に言い聞かせながら、スタートの時を待つ。周りの選手たちも緊張感に包まれているが、この大会は仮装を推奨している為、おかしな被り物を付けている選手が目立つ。そのため、どこか和やかな雰囲気が漂っている。

5時、先にスタートする選手たちが一斉に出発していく。その様子を見届けた里香は、いよいよ自分の番だ。QRコードのチェックを受け、タイム計測が開始される準備が整う。カウントダウンが始まり、いよいよスタート！暗闇の中、里香は意気揚々と走り出した。

最初の1時間は真っ暗な県道をライトを頼りに進む。200ルーメン以上のライトが推奨されていたが、里香のライトは100ルーメン。それでもなんとか走れていたが、他の選手たちの明るいライトに比べると、自分の光量が少し頼りないと感じる。「やっぱり明るい方が走りやすいかも」と思いつつも、そのまま進んでいった。

6時半頃、空が次第に明るくなり、やがて水平線から日が昇る。森を照らす朝日の美しさに、里香は思わず「美しい…」と声を漏らす。その瞬間、何か心の中で新しい感動が芽生えた。

コースには16カ所のエイドステーションが用意されておりますが、紙コップなどの用意はありません。マイカップ制です。一部のエイドでは温かい豚汁やおでんが振る舞われている。「豪華だなあ」と感謝しつつ、体を温めながら再び走り出す。そして、いよいよ世界自然遺産エリアの西武林道へ。ここにはヤクシカやヤクザルが多く生息していると聞いていた里香は、ワクワクしながら進んでいく。

西武林道に入り、いよいよコースは険しくなる。事前の情報で「カーブミラーの番号55から71の区間は特に登りがきつい」と聞いていた里香は、覚悟してその区間を迎えた。実際に登り始めると、まさにその通り。長い登り坂は疲労を蓄積させる

が、アドバイス通り積極的に歩きながら進んでいく。71 番ミラーを過ぎると、今度は 4.5 キロもの長い下り坂が続く。走り続けると足を痛める恐れがあるため、走り歩きを交互に混ぜて慎重に進むことにした。

「このアドバイスがあつて本当に良かった」と里香は感じながら、ふと周りを見ると、ヤクシカに遭遇。「近い！逃げない！可愛すぎる…」と思わず微笑む。次に出会ったのはヤクザルの群れ。少し怖かったが、彼らはおとなしく、無事に写真を撮ることができた。

西武林道を抜け、栗生のエイドステーションに到着。ここは 55 キロの部や 26 キロの部のゴール地点でもあるため、とても賑やかだ。里香も「よし、半分切った！あと 45 キロ！」と自分を鼓舞し、再び走り出す。

午後に入ると気温も上がり、半袖で走るのがちょうどいいくらいになる。エイドステーションではコーラが欠かせない存在だった。里香はこれまでのレースでもコーラを飲んだことがあつたが、今回ほどその価値を感じたことはなかつた。冷たい炭酸が喉を潤し、一気にエネルギーがみなぎるような感覚がする。「こんなにコーラが美味しいなんて…」と、何度もエイドに立ち寄ってはコーラを手取る姿が印象的だった。加えて、巻物や稲荷といった炭水化物もしっかりと補給し、次のステージへと向かう。

75 キロ地点ではドロップバッグを受け取り、必要な荷物を調整する。しかし、スタッフから「ゴールする頃には暗くなるかもしれないので、ヘッドライトは持っていてください」と言われ、結局ライトを手放すことはなかつた。

そして、ついに辺りは暗闇に包まれる。もしライトを預けていたら、ここで走るとは不可能だっただろう。疲労もピークに達し、足元に注意を払いながら進む里香だったが、何かにつまずいて転倒してしまう。膝と手のひらから血がにじむが、周りの選手たちが本部へ連絡を入れてくれて、救護班がすぐに駆けつけてくれた。

「まだ走れる…」と気力を振り絞り、再び走り出す。80 キロを過ぎたあたりで、体のあちこちが痛み出し、膝と手のひらの擦り傷も痛む。里香は「私は一体何をやっているんだろう」と思い、涙がこぼれてきた。しかし、ふと残りの距離と時間を確認した時、「完走できる…！」という確信が湧き上がり、その瞬間、今までとは違う涙が溢れた。「こんな涙流したことない。なんて気持ちがいいんだろう、目標に向かって本気で努力をし、そしてそれを達成するときの感情とは、こういうものなのだろう」と、達成感と感動が胸に広がり、里香の心を強く揺さぶった。

ゴール会場が見えてきて、賑やかな音楽が里香を迎える。ゴールゲートをくぐる瞬間、アナウンスで名前が呼ばれ、先にゴールしていた同じ宿の仲間が手を振ってくれる。「1人じゃないんだ」と感じ、里香は人目を気にせず号泣した。

走っている最中の後半は、この100キロを完走させたら、二度とやるものかと気持ちをへし折られていたがゴールゲートをくぐった瞬間、来年もまた来ると自分に誓ってしまった。

100キロの完走者には屋久杉で作られたメダルと完走証がもらえます。

この屋久杉メダルは絶対に欲しかった。

屋久杉は高級だが私の中でこの屋久杉メダルは金額に変えられない価値がある。

そういう物を大切にしたいと思わせてくれた宝物を手にし、この大会を準備してくれたスタッフの皆様へ感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

大会では至る所で専属のカメラマンが撮影を行ってくれました。その画像はまとめられ、選手へ販売されるとのこと。専用アプリからゼッケン番号を入力すると、その選手だけがピックアップされて表示される仕組みです。里香は100キロ初完走記念として数枚購入しました。

また、アプリでリザルトもすぐに確認できるのが嬉しいポイントです。検索窓に選手名かゼッケン番号を入力すると、誰のデータでもすぐに確認できるため、お友達の状況なども簡単に把握できるのが良かったです。

さぁ次回大会に向けて更に走りこむぞ！と思いつつも明日は階段を下りられるか心配。

エントリー開始は毎年8月の中旬らしい。5時スタート希望者は早めのエントリーをしなければなりませんね。

また来年も来ます。

★ハッシュタグ:★

#ウルトラマラソン完走 #屋久杉メダル #感動のゴール #ヤクシカとヤクザル #コーラ命